

研究テーマ

良好な口腔環境を継続するための口腔ケアに対する
看護師の意識調査と口腔内の変化
～オーラル・アセスメント・ガイドの学習とプロトコルを活用して～

病 院 名

医療法人社団健育会 湘南慶育病院

演 者

〇^{あだち ゆきえ}足立有紀枝(看護師) 久米美幸(看護師) 硯川ひろみ(看護師)

概 要

【研究背景】

要介護高齢者の口腔ケアは「誤嚥性肺炎や口腔内の乾燥を予防、さらには老化や障害による口腔機能の低下を予防・改善すること」¹⁾と示されている。良好な口腔環境を継続する事は重要であるが、日々の看護業務の中では、口腔ケアより全身管理が優先され口腔ケアに十分な時間をかけることができない現状がある。良好な口腔内環境を継続していく為には、口腔内評価ツールを使用して、歯科医師・歯科衛生士と連携し口腔ケア体制を確立していく事で看護師の意識変化はあるのかを明らかにしたいと考えた。

【研究目的】

院内マニュアルにOAG（オーラル・アセスメント・ガイド）評価表を追加し、口腔ケアのプロトコルを作成して良好な口腔内環境が継続され看護師の意識に変化があるか否かを明らかにする。

【研究方法】

1. 対象者：A病棟の看護師15名及び患者4名
2. 調査期間：2020年9月～10月
3. 調査介入方法：①アンケート調査（介入前後）内容（属性、看護師の口腔ケアに対する意識 OAG認知度、介入前後の口腔内写真撮影）
②患者口腔内をOAG評価
③歯科医師協力の下OAGプロトコル作成
④OAGプロトコルに沿って実施
4. 分析方法：statcelversion4 Mann-Whitney検定、t検定、 χ^2 検定
5. 倫理的配慮：本研究はA病院の倫理委員会で承認を得た。対象者には書面で同意を得た。

【結果】

回収率は介入前93%介入後87%であった。関心度・必要性は介入前後70～100%であり、看護師の口腔ケアの意識は高かった。マニュアルの存在の周知は介入前21%であったが、介入後は100%であった。活用状況は、介入前7%と低かったが、介入後は100%であった。多忙な業務でのケア実施は、介入前は86%であったが、プロトコル導入後は54%であり有意差（ $P<0.027$ ）があった。口腔ケアの実施状況は、介入前は毎日100%であったがOAGを用いた介入後の口腔ケアは、毎日31%、時々69%であった。一人当たりの口腔ケア時間は、介入前は1分以内～5分以上とばらつきがあったが、介入後は1分～5分以内は90%であった。OAGに基づいた患者の口腔内環境の変化に有意差は見られなかった。

【考察】

口腔ケアに対する看護師の関心度は介入前後は70%以上、必要性は100%と高い結果より看護師の口腔ケアに対する意識は明らかであった。プロトコルの活用でケアが統一され、時間のばらつきが1～5分未満に短縮したことは、多忙であっても実施している看護師が46%と増加し、看護師の意識に変化があったと考える。

【結論】

看護師の口腔ケアの関心及び必要性への認識は、介入前後で有意差はなく常に意識が高いことが明らかになった。今研究においては、院内マニュアルの周知とOAGの学習とプロトコル活用において口腔内環境の介入前後に変化は見られなかった。

【引用文献】

- 1) 2020年厚生労働省：E－ヘルスネット
[情報提供]